大阪インターナショナルチャーチ　ダニエル・エルリック牧師　2013/04/28
シリーズ: 使徒言行録# 48　聖書箇所: 使徒17:16-34　中心聖句: コリント第一9:22b
タイトル: 福音の架け橋　特別行事:

I.　導入

おはようございます。たいていの場合、人が壁を作るのは恐れがあるからです。物や人を恐れると、自分を守ろうとして壁を作ります。ですから、壁は恐れの象徴だと言えます。一方、橋は希望を物語ります。ふたつのものをつないだり、ギャップを乗り越えたり、新しいところへ踏み出そうとするときに、人は橋を築きます。今朝、私が皆さんにお勧めしたいのは、橋を渡す人になることです。

橋を渡す人になるために、ある重要なステップがあります。それは、恐れを捨てることです。恐れによって、壁を作りたいという思いが湧くからです。恐れがある限り、壁を作りたいという衝動は尽きません。恐れから解放されれば、思い切って壁を壊し、橋を渡すことができます。では、どうすれば恐れから解放されるのでしょう。イエスがその方法を示してくださいました。人は愛に満たされると、恐れから解放されます。愛でいっぱいになった心に、恐れの入り込む余地はありません。

ヨハネ第一4:18-19は、このように表現しています。「 **4:18 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。4:19 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。**」これは喜びと希望に満ちたみことばです。愛することを選ぶのは、簡単ではありませんが、大きな祝福となります。神がどれほど愛してくださっているかを知り、それを認めるなら、私たちは恐れの呪縛から解かれ、晴れて愛の道を歩めるようになるのです。

では、どうすれば神が愛してくださっているとわかるのでしょう。いろいろな方法がありますが、神の愛は十字架に完全に現わされています。**ローマ5:8「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」神は私たちを深く愛してくださり、その愛ゆえにイエス・キリストという人の姿をとってこの世に来てくださいました。それは、ご自身の造られた人間とともにいるため、また、私たちの罪の代価をご自身の命によって払うためでした。このことがわかれば、愛の道もわかるようになります。イエスは三日後に墓からよみがえられました。そのことを知れば、死の恐怖から解放されます。それは、私たちを愛してくださるお方が生きておられ、私たちにも復活の命を与えてくださると確信するからです。

神に心を開いて、神の完全な愛で心を満たしていただきましょう。イエスをしっかり見つめ、イエスの愛に満たされると、勇気が湧いてきます。壁を取り去り、愛の橋を作れるようになります。イエスの福音を人々に分かち合うために、私たちが渡れる橋です。

今日の聖書箇所で、パウロはアテネの人々に福音を分かち合うための橋を掛けました。まず、パウロの第二次宣教旅行で今どのあたりにいるのか確認しておきましょう。パウロはベレアで語りましたが、テサロニケで騒ぎを起こした人たちがベレアにもやってきて、同じように騒動を起こしました。信徒たちはパウロを次の町に送り出すのがよいだろうという結論を出しました。**使徒17:14-15,「 17:14 それで、兄弟たちは直ちにパウロを送り出して、海岸の地方へ行かせたが、シラスとテモテはベレアに残った。17:15 パウロに付き添った人々は、彼をアテネまで連れて行った。そしてできるだけ早く来るようにという、シラスとテモテに対するパウロの指示を受けて帰って行った。**」今日の聖書箇所は、パウロがアテネで合流するシラスとテモテを待っているところから始まります。

ギリシャ人は多くの神を崇拝していました。アテネはギリシャ神話の神々の像であふれていました。アテネの人々が一番大切にしていた神は、ギリシャ神話の女神アテナでした。アテネはこの女神にちなんで名づけられています。アテナの主要な神殿はパルテノン神殿です。パルテノン神殿は、アテネの町を一望できるアクロポリスの丘に今も遺跡が残っています。この巨大神殿は、イエスがお生まれになる400年以上も前に建てられ、パウロが訪れた当時、アテネの町の中心的存在だったでしょう。

では、使徒17:16-34を読みましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録17:16-34, 新共同訳)

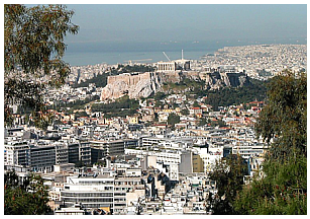
17:16 パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。17:17 それで、会堂ではユダヤ人や神をあがめる人々と論じ、また、広場では居合わせた人々と毎日論じ合っていた。17:18 また、エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、その中には、「このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか」と言う者もいれば、「彼は外国の神々の宣伝をする者らしい」と言う者もいた。パウロが、イエスと復活について福音を告げ知らせていたからである。17:19 そこで、彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが説いているこの新しい教えがどんなものか、知らせてもらえないか。17:20 奇妙なことをわたしたちに聞かせているが、それがどんな意味なのか知りたいのだ。」17:21 すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである。

17:22 パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。17:23 道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。17:24 世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。17:25 ま

た、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。
17:26 神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。17:27 これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。

17:28 皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。17:29 わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。17:30 さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。17:31 それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。」17:32 死者の復活ということを聞くと、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言った。17:33 それで、パウロはその場を立ち去った。17:34 しかし、彼について行って信仰に入った者も、何人かいた。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオ、またダマリスという婦人やその他の人々もいた。

III. 教え

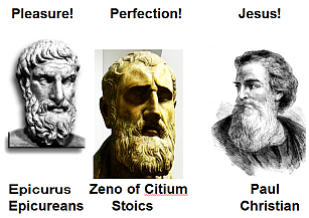


これは、現代のアテネの様子です。パルテノン神殿は、今でもアテネの中心にそびえています。パウロの時代、丘のふもとの街道には、たくさんの商人や旅人たちに混じって、パルテノン神殿をはじめとする神殿に出かける巡礼者がたくさんいたでしょう。アテネには非常にたくさんの偶像があります。アテネでは神を見つけるほうが人を見つけるより簡単だ、とローマの文筆家ペトロニウスが皮肉ったほどです。

敬虔なユダヤ人であり、主イエス・キリストの使徒だったパウロにとって、アテネの偶像礼拝は見るに忍びなかったでしょう。パウロはいたたまれず、シラスとテモテの到着を待たずにすぐ伝道する必要性を感じたのではないでしょうか。パウロは会堂や広場で語りました。思い浮かべてください。アテネの大広場は、商人でごったがえしています。パウロは人ごみに混じって歩きながら、耳を傾ける者なら誰にでもイエスのことを語ったでしょう。

まもなく、パウロの伝道は注目を集めるようになりました。**使徒17:18「また、エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、その中には、『このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか』と言う者もいれば、『彼は外国の神々の宣伝をする者らしい』と言う者も**

いた。パウロが、イエスと復活について福音を告げ知らせていたからである。」



アテネはプラトンの出身地であり、勉学の中心でした。とくに哲学や思想に惹かれる者にとっては都ともいうべき場所でした。古代ギリシャの思想は皆ここから教え伝えられました。パウロの時代には、エピクロス派とストア派が主流でした。エピクロス派とは、エピクロスの思想を追うものであり、死後の世界は存在せず、簡素な生活の中に充足を見出すのが良いというものです。ストア派とは、キティオンのゼノンの教えを追っており、その教えは、道徳と知性の完成により破壊的衝動から逃れると主張します。エピクロスとゼノンに、自分の教えを一言でまとめてもらったら、「快楽」と「完成」と答えたかもしれません。

異なる部分も多々ありますが、エピクロス派とストア派の思想は、現代の人文主義者や仏教徒の考えと似たところがあります。人間の造り出した思想に対するパウロの応えはすべて同じです。それは、「イエス」です。キリストを信じる信仰は、人間の知恵や思想に基づくものではありません。イエス・キリストというお方を土台としているのです。

哲学者たちは、パウロをアレオパゴスへ連れて行きました。アレオパゴスは、ギリシャ神話の神アレスにちなんで名づけられた丘で、ローマ人はマルスの丘と呼びました。英語の欽定訳聖書には、ローマ人の呼び方が採用され、「アレオパゴス」ではなく「マルスの丘」と記されています。この写真は、アクロポリスから眺めたアレオパゴスの景色です。アレオパゴスの丘では、丘と同じ名前で呼ばれる評議会がありました。パウロはこの場所で語るようにと連れて行かれました。パウロはこの時、教えを分かち合う機会を得たと同時に、ちょっとした裁判にかけられていたのです。アレオパゴス評議会には、町での教えを許可する権威がありましたから、パウロの教えを禁止することもできました。

パウロは賢明にも、現地の人々が慣れ親しんだ考えとイエスについての自身の教えとに関連を持たせて説明しました。**使徒17:22-23「 17:22 パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。17:23 道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう。**」ギリシャ人は迷信深く、万が一どこかの神を身過ごしたらたたりがあるかもしれないと恐れました。けれども、すべての神々の名を知っているという確信がないので、「知られざる神」も念のため拝んでいたわけです。

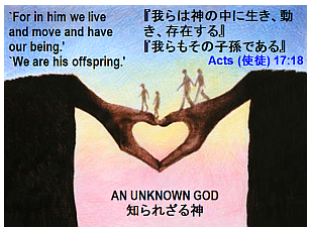
パウロはこの知られざる神を拝む人々の習慣を取り、彼らの文化と世界観につながる橋を掛ける地点としました。人々は外国の神には興味がないかもしれませんが、自分たちが拝む知られざる神についてなら知りたいと思ったでしょう。パウロは続いて、人々に親しまれ愛されたギリシャの詩人の詩をふたつ引用しました。こうして、彼らの文化につながる橋を広く強固なものにしたわけです。パウロは説得力のあるメッセージを語りました。そこには、キリスト教信仰の主たる教えが要約されていました。

ラファエロはその場面をこのように描いています。使徒17章に、パウロの語った言葉はほんの少ししか記されていません。実際には、もっと多くを語ったでしょうが、ルカは主旨のみを記録したようです。それでもなお、パウロの教えが人文主義思想を否定するものだったことは明らかです。パウロの教えには、次のようなものが含まれていました。

1. 唯一まことの神が人類などすべてのものを創造された
2. 神は遍在されるおかたで、いつも近くにおられる
3. 神は人の手で造った神殿に住まわれず、私たちから何をも必要とされない
4. 神はすべてのものに命を与えるお方であり、私たちの父である
5. 神はすべての国や民の上に立つ主権者であられる
6. 神は、罪を悔い改め、神を求めるようにと私たちに呼びかけられる
7. 神はイエスを死からよみがえらせ、すべての裁き主とされた
8. イエスは定められた日に再び来られ、この世を裁かれる

パウロはこの日、数人しか改宗者を得られなかったので、パウロのアプローチは間違いだという声もあります。けれども、私は大半の聖書学者と同意見です。それは、このメッセージが聖書の神についてまったく知らない人々に宣教した模範例だというものです。

伝道する相手の考え方と私たちの信仰との間に、何らかのつながりや共通点を見つけるのは、きわめて重要なことだと思います。パウロのメッセージは、エピクロス派とストア派の間違いを指摘しました。ただしパウロは、まず共通項を見出そうとしました。哲学者たちの信条にもいくらかの真理が含まれていることを認め、それらの点を橋渡しの媒体として、聞き手に語ったのです。



パウロははじめに、知られざる神を用い、彼らの知性へつながる橋としました。その理屈は一目瞭然です。知られざる神を礼拝しているのは、神についてさらに知る必要性を認めていることになるからです。次に、パウロは有名な詩人ふたりの詩を引用します。これは、人々の心につながるためです。**使徒17:28「　皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。**」ギリシャの詩人が書いたものには、多くの間違いが含まれていたのは明白ですが、パウロはその中から共感できるものふたつに焦点を当てます。

パウロは現地の人々の文化や世界観につながる橋を掛けました。それから、創造主なる神についての教えの基礎を敷き、そのあとにイエスとその復活について語りました。人々はパウロのメッセージにどう反応したでしょう。(使徒17:32)「**ある者はあざ笑い、ある者は、『それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう』と言った。**」信じた人もいました。皆が信じてくれたらそれに越したことはありませんが、私たちがイエスのことを話しても同じような結果でしょう。あざ笑う人もいれば、もっと聞きたいと思ってくれる人もいるでしょう。ここで、私た

ちが相手の知性と心にしっかりつながる橋を掛けたなら、神の恵みによって、信じる人もいるでしょう。

数年後、パウロは自分の働きを振り返り、こう記しています。**コリント第一9:22b「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。」**この言葉から、パウロは有効に福音を分かち合うためなら進んで何でもしたことがわかります。パウロには必要ならば何でもしようという意気込みがありました。イエスを伝える相手に届く橋を築くためなら、何でもです。パウロは、自分自身や自分の文化までも捨てて、自分が橋渡し役になろうとしました。人がその橋を渡って、イエスと出会えるためです。

IV. 結び

私たちはどうでしょう。私たちは橋を掛ける人になれるでしょうか。家族や友人の心や思いに福音の橋をかけるには、どうしたらよいでしょう。この日本という大国の人々にイエスを伝える橋を築くには、どうすればよいでしょう。

これは、歌川広重による名所絵です。これは木曽街道六十九次の28番目の絵画です。江戸時代、木曽街道は中山道とも呼ばれ、徳川家が全国支配のために整備した五街道のひとつです。木曽街道は本州中部の内陸山間部を経由し、江戸から京都へ向かう道でした。

この絵をじっくり観察してください。寂しげに見えますか。馬も人も疲れている様子ですか。この絵に描かれた人に、私は言ってあげたいです。イエスは私たちといつもともにいると約束してくださったことを伝えたいです。そして、**マタイ11:28**で、イエスのもとに来るよう私たちを招いてくださることを教えてあげたいです。「 **疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**」そして、この絵の作者には、イエスが何にもまさる偉大な橋であることを伝えたいです。イエスが神と人を結ぶ橋です。イエスの十字架は、死から永遠の命に渡ることを可能にする橋です。

最後に改めてお勧めします。橋を掛ける人となりましょう。壁を壊し、周囲の人のために橋を作りましょう。イエスの名によって掛けられた福音の架け橋です。

祈りましょう。

V. 祈り